

難産だった聖徳太子一万円

すこぶる重厚で高級感あふれる図柄が人気のC一万円券。聖徳太子の紙幣の復活を望む声は今なお多いのは、本券の卓越したデザインに依拠するところも大きいのではないかと思えるほど、美しく、かつ品格があり、いかにも「紙幣」らしい威厳をまとうている。

本年四月末、インターネットオークション「ヤフオク!」において、今となつては滅多にお目にかかれない記号一桁のゾロ目券(記番号R8888888U)が登場し、四一万九千円で落札されるという出来事があった。また、同じIDのユーザーが出品していた7のゾロ目券(W7777777U)も三万八千九百円という高値がついた。近年における珍番収集の盛り上がりとともに、本券の根強い人気も反映された結果であるように感じられる。

昭和三年の発行開始以来、文化人トリオの登場まで、約四半世紀にわたり親しまれた本券。じつは、世間からの反発を受けて発行中止に追い込まれた「幻の聖徳太子一万円札」があることをご存知だろうか。

『大蔵省印刷局史』(以下『局史』)によれば、大蔵省内で一万円券発行に向けて動き出したのは昭和二八年のこと。C一万円券の登場は昭和三三年であるから、五年も前から大蔵省は計画を温めていたわけだ。

きっかけは、昭和二五年六月二五日に勃発した朝鮮戦争の「特需」である。それまでドッジ・ラインと呼ばれる強力なインフレ抑制策で不況に陥っていた日本の景気は一転、米軍を主力とした国連軍の特需に沸くこととなった。兵器や石炭、自動車部品、セメントなどの生産が急拡大し、翌年には鉱工業生産が戦前の水準を超え、個人消費支出も戦前を上回る規模にまで拡大した。

こうした経済情勢を背景に、当時の大蔵省内では一万円券の発行が議論されるようになった。国の予算額や民間の預金額、商取引額が拡大し、最高額面券(B千円券)の銀行券発行高に占める割合は八三%ほどに達していた。さらに、戦後もない頃の勢いはないにしろ、景気拡大に伴うインフレは着実に続いていた。ゆえに、千円を超える額面の銀行券が必要だと考えたのである。また、一万円券があれば、札勘定などの出納事務にかかる負担を単純計算で一〇分の一に減らせるし、金額の大きな決済も簡便になる。まさに一石二鳥ということで、一万円券発行の話が大蔵省内で急速に具体化していく。

ついに昭和二八年五月、大蔵省は、新たに一万円券を発行する方針を正式に固めた。『局史』によれば、六月二日に一万円券用紙の仕様と紙料配合が決定し、七月八日には、すき入れ原版も完

横山 英明

成、七月三〇日に試験抄紙を実施し、八月七日に用紙の色見本を完成、翌八日から西大寺工場で本格的な抄造作業を開始している。

その一か月後、九月二日には報道発表も行った。「銀行業務の簡素化と経費の節約を図り、年末などの季節的な大口決済の需要に応ずるため、新たに一万円券を製造することとした」というもので、このとき新聞各紙に載った幻の図柄が左図である。

表面の右側に笏を持った聖徳太子を、左側に法隆寺西院伽藍の鳥瞰図をそれぞれ凹版印刷で描き、中央には法隆寺夢殿のすかしを入れ、その上



昭和28年発表の一万円券。
9月3日付け『日本経済新聞』朝刊一面より。

部に「日本銀行券」「壹万円」の文字を配し、下部には総裁之印と発券局長印が印刷してある。四隅には、料額数字「10000」と「壹万」の文字を二つずつ互い違いに配置。なお、裏面の図柄はC一万円券と同じである。

寸法は縦八四ミリメートル×横一八〇ミリメートルで、縦幅はC一万円券と同一だが、横幅が四ミリメートル長い。なお、B千円券に比べると縦が八ミリメートル、横が一六ミリメートル長い。

これに対する世間の反応は、大蔵省の意に反して大変厳しいものであった。日本銀行への根回しที่ไม่十分だったためか、政策委員の一部から「時期尚早」との見解が出され、その他、各方面から「高額券はインフレを煽る」「大衆にとっては不必要」「身近な物価との乖離が大きい」などの反対意見が噴出した。

『日本経済新聞』は、九月四日付け朝刊のコラム「大機小機」において、「インフレ見越しの強いつき、こんな大券を出すことは、時期の点から言ってもまずい。市場心理から言うと、インフレ見越しに拍車をかけるようなものだ」という否定的な意見を掲載。翌五日付け朝刊の社説では「一万円札の発行もそれが技術的に見れば当然すぎるくらい当然であることを一般に納得させるならば、一万円札の発行に伴う心理的悪影響を防止することは今日それほど困難ではなからう」と述べ、丁寧な説明と国民の理解が重要であるとの考えを示した。

『朝日新聞』も一万円券の発行には否定的であった。九月三日付けの朝刊に掲載された記事の見出しは「悲鳴上げる窓口 小銭扱ふ興業街や駅など」。日本劇場や東京駅の窓口では、代金の支払いに千円券を出す客が多く、釣り銭の用意に四苦八苦しているのに、一万円券が発行されたら更に厄介なことになるという内容だ。庶民の親しむ各種物価とのアンバランスさを批判している。

記者発表から二か月後の一月四日には、とうとう国会でも一万円券問題が取り上げられた。その質疑応答は春日一幸衆議院議員と吉田晴二大蔵省印刷局長の間で行われ、内容は以下のとおりである。

○春日委員

それからもう一つお伺いをしたいが、あなたの方は一万円札を一千万枚刷られたということが書いてあるが、はたしてそういうものを刷られましたかどうか、これをひとつ御答弁願いたい。

○吉田説明員

一万円札を一千万枚刷つてあるということが書いてあるということですが、実はわれわれの方はまだ刷っておりません。ただ原版と申しますか、これは非常に手数のかかるもので、ふだんからこういうものは、問題になるときは準備いたしておりますので、そういう準備はしております。

○春日委員

他の資料によりますと、一万円札が一千万枚プリントされて、それに対する増加見込額が七千万円、こういうものが見込まれておるが、現実に印刷局の方で一万円札を印刷になったようなことは断じてありませんか。

○吉田説明員

一万円札を刷っているようなことは断じてありません。

○春日委員

それではその問題はそれでよろしい。
〔第十七回国会衆議院大蔵委員会議録第三号より〕

世論の合意がない現状を顧みず、着々と製造を進めているのではないか。こうした疑惑の真偽を印刷局長に質している。とても一万円券を発行できる状況にはないと分かる。

なお、議事録によると、この場には「大蔵事務官」として印刷局の業務部長も出席していた。おそらく印刷実務に関する詳細な質問をされたときに備えて待機していたと考えられる。ただ、結局のところ一万円券に関する質疑応答での出番は無かった。

前述のとおり、報道発表（昭和二八年九月二日）の約一か月前から用紙の製造は始まっていた。ゆ